

## 【9】三島由紀夫とダム

今年（2020年）は小説家三島由紀夫が1970年（昭和45年）11月に亡くなって50回忌になるというので、彼を偲んで新聞、雑誌、TVに取り上げられました。

ところで、三島がダムを背景にした小説を著したことは土木技術者の間にあまり知られていません。昭和30年に出版された“沈める滝”という長編の恋愛小説があります。題名はダム建設により水没する小さな滝にちなんだものです。わが国で最大級のダムである実在の奥只見ダムが小説では「奥野川ダム」という名になっています。

小説の主人公は、両親を早くに失い電力界の大立者の祖父に育てられ、金に不自由せず容姿端麗、頭脳明晰な電力会社のダム技術者でいずれ重役と目されているという小説の中でしかあり得ないようなヒーローです。三島はこの小説を著すに先立って実際のダムの建設現場に足を運び、建設事務所を訪れ、技術者にインタビューし、技術書に目を通し、河川の流量観測を体験するなど綿密な調査、取材活動をしています。それは小説の構想を考える思いつきなどの走り書きを混え、「ダム」と表紙に書かれた大学ノート4冊の取材ノートとして残されています。

プロの作家ともなると一編の小説の背後にかくも膨大な準備作業があると知って改めて驚かされます。その取材ノートの第一冊目の冒頭にこうあります。

“ダム（芸術の象徴）が何ものにも関係しないという確信。何の関係も考えず、ただダムの完成にのみ盲くら滅法に邁進。「盲らになれる能力」＝天才。…”

ダム技術者を素直に誉めているようには思えませんが悪く言っているわけでもないようです。小説家の芸術としての創作活動とダムの建設活動に通じ合うものがあると感じたのかも知れません。